角川文庫
—3356—

夢の虐殺

森村誠一

角川書店

夢の虐殺

他五篇

森村誠一

角川文庫

3356

目次

夢の虐殺　五
高燥の墳墓　六九
派閥抗争殺人事件　三一
侵略夫人　一六三
殺意の造型（ヘアー）　二〇五
人間溶解　二五一
解説　中島河太郎　三二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

夢の虐殺

1

勝田慎一は地下鉄に乗った。終電近い車内には、店を終えたホステスや、酔客の姿が目立つ。勝田自身の体にも、かなりのアルコールが入っている。

つい少し前まで、そのような店の一つで、彼女たちを周囲に侍らせて、飲んでいたのだ。接待の客や、社の上役たちを車に乗せて送りだしてから、一人地下鉄に揺られて帰るのは、侘しかった。

同一方向に帰る上役は、いっしょに乗って行けといってくれたが、勝田は辞退した。彼は侘しくとも、気楽なほうを選んだのだ。

その上役の部長は、妻の遠縁に当たる。仲人に立ってくれた社長にも近い位置にいる。彼と二人だけの車に乗れば、当然話題は、勝田の妻のことにも触れてくる。すでに冷えきった妻とのことを、上役の手前、粉飾して語るのは、耐えられない。

車内に空席はなかったが、辛うじて新聞を広げて読める程度の余裕はある。だがこの時間にな

ると、新聞を読んでいる者の姿はない。

夜の遅い地下鉄の車内は、脂粉のにおいとアルコールと疲労感が攪拌(かくはん)されて、一種の頽廃(たいはい)のカクテルを重く澱(よど)ませている。

「今日も一つ、おれの小さな夢が消えた」

酔いに重くなった身体を、吊皮にぶらさげて、勝田はおもった。どんな夢が消えたのかわからないが、一つの夢が消えたことは、確かであった。消えたのではなく、潰(つぶ)されたといったほうが、正確かもしれない。

おもえばこの数年間、勝田は毎日、夢を潰されながら生きてきた。

――今日は何かがおきるかもしれない――

と、毎朝家を出るときにもっていたささやかな期待は、一日の勤めを終えて家路をたどるときに、見るも無惨に潰されていた。

サラリーマンの毎日になにもおこりはしないのである。ベルトコンベアに運ばれる製品のように、定年までの軌道は、敷かれている。飛躍や跳躍や、あるいはべつの展望を望むためには、会社を辞(や)める以外にない。

彼らの生活の行動範囲は、すべて、会社という〝釈迦の掌〟の中に限定されている。

勝田もかつて大きな野心をもっていた。それが大学を卒(お)え、一流会社に入ったつもりで、いまの会社の巨大な組織の極微部分品にはめこまれて稼動しているうちに、速やかにその野心を失っ

ていった。

組織に組みこまれた人間に、野心などはいらない。むしろ有害である。ただ黙っておとなしく、〝人間部分品〟としての機能を果たしているだけでよい。

毎日の小さな挫折が、勝田の野心を磨滅させていったといってもよかった。

――このままいったら、おれはだめになる――

ということが、よくわかっていながら、冬の夜、ぬるい風呂へ入ったように、出よう出ようとしながら、一寸のばしにのばしている状態が、ずっとつづいているのである。

冒険を求めて、外へ飛びだしても、現実の酷風に晒されて、風邪をひくだけだ。まがりなりにも、いまの場所へしがみついていれば、当面の餌と、安手の居心地のよさを保障される。夢で、腹はいっぱいにならないのだ。

「ねえちゃんよ、ねえちゃんたら、そんなにツンツンするこたあねえだろう」

ものおもいに耽っていた勝田のすぐそばで、酔った男のだみ声がおこった。見ると労務者風の男が、二十歳前後のOLにからんでいる。

化粧や服装のどぎつい女性が多い中で、残業で遅くなったのか、地味な仕立てとデザインのワンピースをまとったその娘は、労務者から顔を背けて、相手にならないようにしている。

目元の涼しい、愛くるしい面立ちをしているが、表情が必死に恐怖を耐えている。

「ねえちゃん、どうしてこっちを見ねえんだよ。あんまりおたかくとまるんじゃねえ」
労務者は、娘が無抵抗なのにつけ上がってますますからみついている。聞くに耐えない卑猥な言葉を、浴びせかける。筋肉労働で鍛えあげた、いかにも屈強な体軀、角張った顔の中央に据えられた細い目が充血して、無抵抗の獲物を捉えた獣の残忍な喜悦を浮かべている。無精ひげの中の厚ぼったい唇が、舌なめずりをした。
娘は、頬に酒臭い息がかかるばかりに、労務者に顔を寄せられて、おびえきってしまった。
「なにも取って食おうってんじゃねえ。こっちを向きな」
労務者は、真っ黒に汚れた爪ののびた手をだして、娘の顎をむずとつかんだ。車内がシンとしずまり返った。
「たすけて」
娘は、ついに恐怖に耐えかねて、言った。その声も無惨に震えて、よく聞きとれない。
「たすけてだと？」
労務者の目が凶暴に光った。
「おれが何をしたってんだ？　やいっ」
労務者がどなった。娘の身体がビクッと震えた。震えたのは、娘だけではなかった。成行きいかにと、見て見ぬ振りをしていた乗客がビクリとした。こそこそと隣りの車輛へ移動する者もある。生憎、電車は最も駅間隔の広い地点を走っている。

「おれが何をしたってんだよう」
労務者は、車内に自分を制圧しようとする者のいないことを、敏感に悟って、ますます居丈高になった。
乗り合わせた乗客は、いずれも娘を可哀相だとはおもうものの、自分から危険を冒して救ってやろうとする者はいない。労務者は、いかにも凶暴な顔つきをしている。酔ってもいる。
下手に手出しをしたら、なにをされるかわからない。ここは見て見ぬ振りをするにしくはない。
車内には、かなりの若い男の乗客もいたが、みな一様に知らん顔をしていた。そのくせ、事件がどう発展するかと好奇心だけをたくましくしながら、安全圏に身を置いて、そっと様子をうかがっている。
「許してください」
娘は周囲に訴えても無駄だと悟ったのか、労務者に訴えた。
「許してくれだ？　ふん、おたかくとまりやがって、甘ったれんじゃねえや。おれを見そこなうんじゃねえ」
労務者は、調子づいて、娘の唇に、自分の酒臭い口を寄せようとした。
「いいかげんになさい！」
そのときかんだかい女の声がして、娘を庇うように労務者の前に立ちはだかった者がある。
やはりＯＬ風の若い女が、面を紅潮させて、労務者に対い合っていた。見るに見かねて立ち上

がったという格好である。

彼女の怒りは、労務者に向けただけではなかった。か弱い女性が、ならず者にからまれて救いを求めているというのに、だれも助けてやろうとしない冷淡な乗客に対しても怒っていた。

こちらはからまれたOLよりも二、三歳年がいった顔の輪郭の濃い、気の強そうな女性である。品のいいスーツをまとった高級OLといった風態である。

「なんだと!?」

労務者は、抵抗する者がないとたかをくくっていたところへ、いきなり飛び出されて、少したじろいだ様子だったが、相手がやはり女性だと知って、前以上の虚勢を取り戻した。

「なんだ、てめえは」

彼は充血した目を、新しい獲物の上に据えた。最初の獲物は、そのかげに身をすくめて震えている。彼にとっては、獲物が一匹増えたようなものだった。

「てめえが、代りに相手をしてくれるというのかい」

労務者は、新たな獲物に近々と顔を寄せて、臭い息をまともに吹きかけた。彼女は面をそむけなかった。それをする代りに、いきなり労務者の横っ面を張った。

ピシャリとまことに美事な音をたてて、よもや弱い獲物からそんな反撃を喰おうとは、おもってもいなかった無防備の労務者の横面に、その張り手は命中した。

「このあまア」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

酔いに赤く染まっていた労務者の面が、怒色を加えて、赤黒くなった。獲物を嬲る余裕が消えた。本気で怒ったのである。

――これは危ない――

勝田が危険を意識したとき、労務者は懐中に隠しもっていた刃物をギラリと抜きだした。固唾をのんで見守っていた車内の女性乗客の口から、悲鳴がもれた。

勇敢なＯＬもさすがに蒼白になって立ち竦んでしまった。

「ちくしょう。ふざけやがって。どうするかみやがれ」

労務者は刃物を構えて、二人の女性に迫った。女性はたがいに抱き合って、必死に逃げ路を探すのだが、狭い車内に閉じこめられているので、逃げ場所は限られている。

刃物の光に、他の乗客が争って退いたスペースの中で、絶望的な鬼ごっこがはじまった。

「だれかたすけてください。この乱暴者を取り押えて」

さすがに気丈な女性も、周囲の乗客に救いを求めた。しかし労務者がなにももっていないときでも、知らん顔をした乗客である。凶器を振りかざしてはっきり凶暴性を剝きだしたいま、なおさら手を貸そうとする者はいない。

「このあまめ、カッコつけやがって、かんべんならねえ」

労務者は、わめきながら、凶器を構えて二人に突っかかっていた。

「やめて！」

第一撃は辛うじて躱した。労務者がかなり酒を飲んでいたことが、狙いを不正確にした。

「みなさん、お願いです。たすけてください。この乱暴者を止めて」

ＯＬは逃げながら、必死に乗客たちに救いを求めた。しかし乗客たちは、いずれも下を向いて、哀れな犠牲者と目が合わないようにしている。

勝田の心の中に衝き上げるものがあった。だが、身体が意志に反して萎縮したようになって動かないのだ。労務者の振りまわしている凶器の白い光や、彼のいかつい体軀の前に戦意がたちまち萎えてしまう。

〈なんとかしてやらなければ、なんとか〉

と心は焦っても、いっこうに行動に結びつかない。その間に労務者は第二撃を振った。足もとも定かでないほど酔っているので、また躱された。そのことが労務者をますます怒らせたようである。

電車がスピードを落として次の駅へ着いた。車内でそんな騒ぎがおきているとは知らない新しい乗客が乗りこんで来た。

「何をしてるか！」

新たな乗客の中から、刃物を振って暴れまわっている労務者を見て、とてつもない大声をだした者がいる。一瞬労務者がひるんだ隙に、つかつかとそばに歩み寄ると、手刀で、刃物を叩き落とした。

その鮮かな手並みは、そのような心得のある者らしかった。つづいてその乗客は、手錠を取り・だすと、キョトンとした労務者の手首の自由をワンタッチの動作で拘束してしまった。

「お嬢さん方、お怪我はありませんか」

私服刑事がたまたま乗りこんで来たらしい。労務者は、手錠をかけられると、いままで荒れ狂っていたのがまるで別人のようにおとなしくなった。

一駅の区間、地下鉄の車内を恐怖で冷凍づけにした事件は、あっけなく幕を閉じた。乗客たちがホッとため息をついた。次にみな一様にバツの悪そうな顔をした。特に男の乗客たちは、きまり悪そうであった。

女性から救いを求められているにもかかわらず、恐怖に萎縮して、ついに一指も上げられなかったのである。

「君子危うきに近寄らずだ」

「下手に手をだして、怪我をしてもつまらんからな」

「妻子があると、ヒロイズムだけから行動はできないよ」

グループらしいサラリーマンたちは、そんなことをこそこそ言いながら、バツの悪さを隠している。下車駅でもないのに、次の駅で逃げるように下りて行く若い男の乗客が目立った。女性乗客から無言の抗議を受けているように感じていたたまれなくなったのにちがいない。

逃げだして行った者は、まだ恥を知っているといえた。まったく無関係のこととして、表情も

変えずに見過していた者もいる。
数駅通過すると、からまれた二人のＯＬも、労務者も、刑事も下りてしまった。乗客は完全に入れ替ったようにみえた。
大都会におきたごく小さな波紋は、その巨大なたくましい営みの中に吸収されて、痕跡すらもとどめていなかった。
先刻、多少バツの悪いおもいをした乗客たちも、すでに自分の生活に忙しく、遭遇した小さな事件を忘れていた。
しかし、勝田慎一は、この事件によって、ふたたび立ち上がれないほどに打ちのめされていた。
〈なぜおれはあのとき、たすけてやらなかったのだろうか？〉
〈数年前のおれだったら、決して見過しにしなかったはずだ〉
彼は数年の間に、精神に進んだ病蝕（びょうしょく）の大きさを、この事件によっておもい知らされた。
〈おれはすっかり去勢されていたのだ。おれは本当にだめになってしまったのか？〉
――いやそんなはずはない――
〈刑事が乗りこんで来るのが、もう一瞬遅かったなら、おれは、彼女たちを救っていた〉
――嘘をいえ――
自分の心を納得させるために発明した抗弁（こうべん）が、内なるべつの声によって、無惨に否定された。
あのとき刑事が乗りこんで来なくとも、自分は何もしなかったのにちがいないのだ。労務者の

振りまわす刃物の前に、麻痺してしまった情けなさを、実感として覚えているだけに、その抗弁が、欺瞞であることはよくわかる。

そんなごまかしで、心に押しつけられた恥の刻印を消すことはできなかった。

刃物におびえただけではなかった。泥酔して、足許もろくに定まらない酔漢の一にらみの前に、自分は蛇にみこまれた蛙のようにすくみ上がってしまったのである。

〈あれが幼稚なヒロイズムであり、安価な正義感だというのか？〉

〈いやいやそうではない。おれは鉄筋の檻の中に飼われた家畜人として過ごしているうちに、人間としていちばん大切なものまで失ってしまったのだ〉

勝田は恥ずかしくて、面も上げられなかった。だれも彼の方を注意している者がいないのに、世界じゅうが、彼の臆病を責めているようにおもえた。

電車は、彼の下車駅へ来た。彼は意識せずに、ドアの近くへ移動した。何年も堆み重ねた画一的の生活のために、身体が自動的に反応してしまうのである。

練達の運転手のように、行動に意識が伴わない。規則正しい反復に、身体が鉄筋の家畜人として、完全自動化されていた。

2

家に帰ると、妻のゆかりがテレビを観ていた。

「お食事は？」
「すんだ」
「お風呂へ入る？」
「うん」
「少しぬるいかもしれないけど、湯かげん自分でみてね」
「ああ」
これだけの会話を交しただけで、ゆかりはまたテレビの画面に戻った。たしか昨夜もそんな風な会話を交したような気がする。
ここは、近くの人々から『住井御殿』と呼ばれて羨しがられるデラックスな社宅である。完全冷暖房、給湯設備、全戸三ＬＤＫの鉄筋の社宅が、まるでただみたいな値段で社員にあたえられる。
家の中のどの水道の蛇口をひねっても、熱い湯がほとばしり出るから、風呂の湯かげんは自分でみることができる。
テレビでさえ、各家族専用に大型サイズのカラーテレビが一戸三台ずつ備えつけられてある。親子三人までは、それぞれテレビを独占して、好みの番組を見ることができる。
冷蔵庫の他に冷凍庫までが据えつけられてあるから、主婦の手間は、極端に省かれる。
だがあまりにも過剰な便益は、家族間の人間的交流を奪って、機能本位の機械の冷感が人間の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com